

P1 イルカ骨多量出土後の真脇遺跡発掘調査

高田秀樹（能登町真脇遺跡縄文館），[○]平口哲夫（金沢医科大学），
真脇遺跡調査団

Research at Mawaki archaeological excavation site in Noto, Central Japan, post dolphin Bones Discovery

Hideki Takada (Mawaki Jomon Museum, Noto Town), Tetsuo Hiraguchi (Kanazawa Medical University), and Mawaki Excavation Unit

真脇遺跡は縄文時代前期初～晩期末の集落遺跡である。1982・83年（第1・2次調査）の発掘調査で、縄文時代前期末～中期初の層を中心に多量のイルカ骨が出土した。そのほか、縄文土器をはじめとする多種多様な遺物が大量に出土し、縄文文化を研究する上で不可欠の重要遺跡と位置づけられ、1989年に国指定史跡、1991年に出土品219点が重要文化財となった。1996年から史跡指定地の公有化に併せて史跡整備計画を進め、1998年から発掘調査を再開、縄文時代の集落変遷や環境変化を明らかにするため地質調査と自然科学的分析も実施することとなった。

第3～6（1998～2001年）次調査は縄文時代中期の住居跡の拡がりを確認するために面積310㎡の調査区を設定した。新たな住居跡は発見されなかったが、ほぼ同時期（縄文時代中期前葉～中葉）の整地層が検出された。整地層は調査区全面に30～50cmの厚さがあり、多くの遺構群が発見されている。特に注目されるのが、調査区の西側において検出された、長径140～150cm、短径100～130cm、深さ35～50cmの楕円形の土坑4基である。内3基からは底板が出土し、そのうち1基では板上に人骨（成人男性）が残っていた。このような埋葬方法は類例がなく、「板敷き土壇墓」と名付けられた。周囲に同規模の土坑が検出されないことから、被葬者は当時のムラのリーダーである可能性が高い。

第7～9（2002～2004年）次調査では縄文時代晩期の環状木柱列を調査するために面積300㎡の調査区を設定した。第1・2次調査時にその一部が発見されたことから、調査区外への拡がりが予想されていた。その範囲を全面的に調査した結果、直径5.3～7.4mの規模で、ほぼ同じ場所に6回立て替えていたことが確認された。

第10～12（2005～2007年）次調査は第1・2次調査で検出した縄文時代中期住居跡の規模と内容を明らかにするため、面積130㎡の調査区を設定した。第4号住居跡は東西約5.7m、南北約6.6m、平面長方形をなし、床面が2枚検出された。第3号住居跡は直径約5.7mの平面円形で、中央に石囲炉がある。これら2棟の住居跡の床には粘土が貼られ、周囲との高低差が認められないことから、平地式住居と考えられている。特に第3号住居跡の炉跡は6回作り替えられており、その炉に伴う床面も確認されている。2008年はこの第3号住居跡の炉跡と床面の詳細な調査を実施する予定である。